

花の太陽から花がふる

大西 健太郎

むくちとおしゃべりが かがんでいる  
黙ったまま 一カ所を向いている  
小さな水たまり

ふうつと風が抜けた

並んだ鼻頭をかすめる波紋

みなものにキラリ

黄金色に漂う光の粒！

二人は 夢中で水を掻き上げた

たちまち水は濁り 二人の顔も泥の中

泥の溝をつたう ひとすじの涙

一滴 また一滴

二つの肩は じっと並んで待った

しずくが全て落ちきるまで

乾いた泥の割れ目に 空が滑り込んだ

互いにしつかり握られた手

二つの手は そつと水面をくぐった

むくちは 自分の笑い声に驚いた

おしゃべりは 生まれて初めて口ごもった

みなもの向こうに 太陽

真っ赤に燃え上がる